

佳作  
「つなぐ姿」

桑原 大吾さん

あれからもう数年が過ぎた。祖母がいない正月を過ごすのはもう何度目だろう。冬の凍えるような寒さの中、白い息で炬燵の豆炭を補充していた姿がいまはもう懐かしい。

祖母は人間ドックの検診で、胃がんが発見された。幸い早期だったので、胃を大きく切除し、一年後には畑仕事ができるまで回復した。祖母が六〇歳のことだ。その時の祖母は、自分の身の心配より、家族のことを心配していた。自分がいなくなったら祖父や家族の面倒はだれが見る、畑はどうするのだ・・と。

祖母は回復してから、人間ドックの検診していただいた先生や、毎年検診を受けることに感謝していた。病気が見つかって以来、食生活にも気を使い、減塩を意識していたようだった。それでも、祖父や家族の好みに合わせ、濃い味付けや食べ残した残り物をもったいないからと祖母はいつも食べていたように思う。そして祖母はまた、八〇歳を過ぎ胃がんが再発した。

祖母は懸命に病気と闘ったが、病気が発見されてから一年後に亡くなった。

それでも、やはり毎年の検診がなければ、それすら発見が遅れ、苦しい思いをしたであろう。祖母はいつも病室で、孫や家族の自慢、今までの苦勞を感謝の言葉に変え病室で看護婦さんに話していた。

それを思い出すたび僕は思うのだ。

僕は生かされているということ。

感謝という言葉では表しきれない思いがこみ上げ、無常な寂しさと柔らかい優しさが同居するような感覚を覚えた。

人間ドックの検診によって、日々の体調や習慣を振り返る機会を常に与えられている感謝を忘れない。

そして、自分の体調の異変や不治の病に際しても、自分より他者のことを慈しむ祖母の後姿を僕は忘れない。

祖母の後姿から学んだこの言葉にならない思いを、僕も家族や関わる全ての人に、祖母の姿が自分の姿に重なるように、静かにつないでいきたいとおもう。

人間ドックの毎年の検診で、少しでも早期に病気を発見すること、そして生活習慣を適正なものに自己管理することは基本だが、問題は病気や異変が発見されてからどうするのかということであろう。

自分の事より「他が為」に生きた祖母は、たくさんの家族や知人に看取られながら笑顔で他界した。

祖母の残した意思や姿勢は、たぶん僕だけでなく多くの人に今もまだ残っている。

あのごつごつした温かい手を僕は忘れない。

僕もあの温かい手を、今度はだれかに差し伸べられるような人生を送りたい、そう願う。